

働き方改革

岡田鉄工所

岡田鉄工所（愛知県岡崎市、岡田隆治社長）は、コロナ禍による業務閑散期に多能工化の研修を実施することで働き方改革を実現した。同社が手がける工作機械向け鋳物部品の製造工程は作業者の技術や技能によるところが大きく、受注増による残業増加や休暇による稼働率低下が課題だった。多能工化によって生産性が上がり、営業利益は3割向上、残業時間は半減した。好循環の波に乗り、事業拡大につなげる構えだ。

（名古屋・永原尚大）

「リーマン・ショックが主力。コンピュータ時の反省がきっかけ。ター利用設計（CA）だった」と岡田社長はD）やマシンングセンター振り返る。2008ター（MC）で切削削年、不景気による受注工する工程を踏むが、減で従業員に手持ち無いずれも属人的だ。沙汰な時間が生まれ景気が向上につれた。これまでの忙しさで業務量が増加するをねぎらうために休暇も、担当者が休むと製造としたが、この判断が造が止まってしまい、繁忙に転じた現場を苦「会社が機能しない状態だった」（岡田社長）。

岡田鉄工所は工作機械や鍛圧機械の油圧シリンダーなどを手がける。複雑形状の鋳物加工、複雑形状の鋳物加工（19年時点）と現場の

コロナ禍に多能工化

逆境の中で生産性向上

負担は高まっていた。効率化を目指し、段取りや在庫管理の改善などを進めた。その中で田社長や経営幹部が改画」では、生産工程の「現場は忙しく、教育

負担が高まっていた。効率化を目指し、段取りや在庫管理の改善などを進めた。その中で田社長や経営幹部が改画」では、生産工程の「現場は忙しく、教育



横型MCの操作方法など新しい技能を研修することで多能工を育成

そこでリーマン・ショック後の反省を生かし、20年5月から新たな技能を身につける研修を始めた。ビデオ会議システムを活用したCAD講習をしたほか、MCの扱い方などを教えて多能工化を進めた。現場管理者向け研修にも取り組み管理しやすい状況を整えた。

その結果、生産性が2割向上し、残業時間を19年比でほぼ半減できた。さらに、利益面の改善効果も表れる。売上高はコロナ禍前の19年度と同水準に回復してきたが、営業利益が「19年度比3割増で着地できると見込んでいる」（同）。生産効強化し、「将来は従業員を倍の100人規模にしたい」と岡田社長は意気込む。



岡田鉄工所は工作機械や鍛圧機械の油圧シリンダーなどを手がける。複雑形状の鋳物加工が主力

いる。

今後は部門間の連携に着手する考えだ。MCを使用する製造部門と組み立て部門の間で人事交流できるように、従業員を育成して、忙しい時は柔軟に組織体制を変えられる仕組みを整える。